

## 中国国境再考：フランス、ベトナムおよび「コリアン・モデル」

ピエール・グロセール  
(パリ政治学院)

中越国境の歴史は古い。19世紀末にフランスがベトナムに代わって支配したこの地域の境界設定は、10年以上に亘って続いた長く困難なプロセスであった。極東の帝国間での新たな境界設定にフランスは加わったわけだが、この国はその後中華帝国とその「支流系」という遺産に付きまといられることになった。1945年から1947年にかけて、フランスは北ベトナムを中国の野心から救い出し、元の状態に戻したと考えていた。しかし1949-1950年以降、中越国境地域とトンキン、すなわちベトナム北部の諸省は国境紛争の地となった。最終的にフランスはこの国境を「失い」、トンキンがフランスのアイデンティティの境界となった。それまで植民地・軍事支配のエリート、外交エリートたちによって、中越国境は「自由世界」、フランス連合、フランスの力強さの境界として様々に規定されてきたからである。

本稿の最終節では、同時期に勃発した朝鮮戦争がインドシナ問題対応に関する考え方をいかに左右したかを示す。朝鮮半島における休戦は、事実上、38度線の回復によってもたらされた。ベトナムの場合、休戦は短く、17度線は境界線として功を奏さなかった。フランスのルネ・プレヴァン首相は1951年初頭に米国トルーマン大統領に対し、「朝鮮半島とインドシナの状況には多大な類似点が存在する」と述べたが、相違点も同様に多大だったのである。

新たな境界線によってどのような分割が生まれたのかについて、見解は様々だった。北ベトナムと南ベトナム、トンキンとコーチシナ、中国と東南アジア、共産主義と「自由世界」。これらすべてのイメージに、この細い、無防備の境界線が合致することはないかもしれない。本稿ではフランスの公文書保管所6か所で得た資料を利用し、ベトナム北部において境界と境界線の変更をもたらした数多くの観点を明らかにする。